

# 北海道発の包摂型社会づくり

宮本 太郎

個人的なことからで恐縮であるが、三月いっぱい北海道大学を辞して、東京の大学に移籍することになった。家族共々、北海道への愛着は強く、これまでは札幌を離れませんと申し上げてきた。出張が重なり疲れ果てて新千歳空港に戻ってきたも、札幌市内の自宅に向かうバスのなかから見る山々の連なりに深く抱かれるような感覚を覚え、芯から癒された。北海道で得た様々なつながりや、豊かな居住環境も手放しがたかった。しかしながら、週に二度も三度も札幌を離れる生活で、北大にご迷惑をおかけすることも増えて、決断をした。

北海道での一〇年あまり、地方自治の現場からは多くを学んだ。福祉政治を研究主題とし、また国の社会保障改革論議に参加してきたことから、とくに社会的弱者の支援をめぐる道内の様々な取組から大きな刺激を受けてきた。実際のところ、北海道発の包摂型福祉は、全国での政策展開のモデルともなってきたのである。

たとえば、釧路において生活保護受給者の自立支援のために考案されたさまざまなプログラムは、自立の助長を謳いながらその仕組みを欠いていた生活保護制度を刷新するものと思われた。稼働能力のある受給者が、公園の管理や運営、介護事業、農作業などに携わ

るなかで、正規就労に向けたリハビリテーションをおこなうものであるが、やみくもに就労においたるのではなく、こうした参加の場所をそれ自体居場所として大切にしようとする奥深さもある。

私自身関わった社会保障審議会の「生活困窮者の生活支援の在り方に関する特別部会」は、この釧路の経験を一つのモデルとして、この一月に報告書をまとめた。ここでは、新たに釧路のような「中間的就労」の場を拡大していくことを打ち出した。現在はそのため支援施策を、法律にしていくなかで準備がすすんでいる。

同じく、釧路の地域企業創造センター「まじくる」は、様々な補助事業を束ねつつ、雇用から排除されてきた人々が相互に混じり合い助け合いながら、自ら積極的に社会とつながっていく回路を構築している。また、当別町の特定非営利活動法人「ゆうゆう」の展開する共生型地域オーブンサロンは、高齢者、障がい者、子どもたちが集い相互にサポートしあう拠点となった。主に障がいをもった人たちの就労するカフェに高齢者や町の人々が集い、高齢者の介護予防事業も兼ねた駄菓子販売に学校帰りの子どもたちがやってくる。障がいをもった子どもの一時預かりもおこなう。そこを福祉を学ぶ学生たちが支える。

従来、縦割り行政によって個別に管理されていた当事者が共に支え合うことで力を得るかたちは、共生型福祉と呼ばれる、富山などに先例があった。北海道のこうした取組は、当事者の共生を実現するだけではなく、それを地域との共生に高めようとしているところが特徴である。このような共生型福祉についても、厚生労働省の事業として全国的な展開が始まっている。

私自身、ヨーロッパに由来する社会的包摂という考え方を日本に「輸入」しようとしていて、実はその先駆的な取組が自分の足下ですすんでいたことに気づいた次第であった。少なくとも、東京経由でヨーロッパに学ぶという価値序列は成り立たないことを思い知った。考えてみれば、ヨーロッパでもそうであった。むしろ経済や金融の中心から離れ自然環境も厳しい北の国々から社会的連帯の新しいかたちが生み出され広がっていったのである。もちろん、こうした支援の取組もたくさん課題を抱えている。何よりも、人々を包摂していくために、雇用機会をどのように作りだしていくかという点を併せて追求していかなければ、就労支援は空回りをしてしまうであろう。あるいは、すべての人々が参加できる地域のために、分権改革のなかでどのような財政調整が必要かも積極的に提起していくべきであろう。

これまでに学んだ事柄を反芻しつつ、またつながりを大事にしなが、北海道における包摂型社会づくりの動向を見つめ続けていきたい。

八みやもと たろう・北海道大学大学院法学研究科教授